

# 享保年間以降における江戸で出版された中国法帖

馬 成 芬

## The Published Rubbings for Chinese Calligraphy at Edo after the Kyoho era

MA Chengfen

In the Edo era, those commodities that entered Japan from China through Nagasaki trade contained a large amount of calligraphy materials, especially rubbings for studying calligraphy. These rubbings that entered Japan from China had become guiding materials for Japanese calligraphy circles to study Chinese calligraphic style in the Edo era.

China set a large number of imports to Japan, also published in Japan. Through the publication of that time in the post, also can pry out China calligrapher popularity in Japan.

キーワード：江戸、享保、出版、中国、集帖、法帖

### 一 はじめに

江戸時代における長崎貿易を通じて中国から日本に書法関係資料、特に書法を学ぶ手本としての法帖が大量に輸入されたことはすでに明らかにされている<sup>1)</sup>。江戸時代の日本書道界では、「唐様」書道すなわち中国風書道を学ぶことが文人と儒者の間に流行していた。彼らは全て中国書体に夢中になって競って真似るようになった。この背景の下に、中国法帖は日本書道界に大いに切望され、中国から多くのものが日本に輸入されたのは当然のことであったと言える。

中国法帖が大量に日本に輸入されたが、広く流通させるために廉価版として日本でも翻刻され、その模刻などの形式で出版されたようになった。そのため江戸時代の法帖の出版された状況から、中国書家の日本書道界における人気の高さを窺い知る可能性がある。

「唐様」の書風を学ぶには長崎に渡来し滞在している中国人や貿易船で来航する唐人から学ぶものもあ

1) 大庭脩『江戸時代に於ける唐船持渡書の研究』関西大学東西学術研究所、1967年3月。

馬成芬「江戸時代の日本に輸入された中国の集帖について」、『文化交渉』東アジア文化研究科院生論集、第3号、2014年。

ったが、そのような書家は極めて稀で、一般的には真跡と法帖、とりわけ法帖によるものが多かったと思われる<sup>2)</sup>。中田勇次郎によると、「唐様」書道を学ぶ形態はやはり中国から日本に輸入された法帖によるものが多かったことが明らかにされている。たとえば江戸時代の書家であった松下烏石は元文四年(1739)の『書法群碎』の「學書法」において、江戸時代の書家が書を自習する方法として次のように記している。

凡學書、從法帖入、置之几上、懸之座右、朝夕諦觀、以思其運筆之理、而後可以模臨焉。……<sup>3)</sup>  
と記しているように、書法を学ぶ者は、「法帖」を机の上に置いてそれを見ながら模写、臨書するのを基本としていたとあるように、手本の多くは法帖が普遍的であり、頻繁に利用されていたと言えるであろう。

その「唐様」書道の発展過程はどのようであったか言えば、成長期(1736-1750)、開花期(1751-1803)と完成期(1804-1867)<sup>4)</sup>の三段に分けることが指摘されている。すなわち「唐様」書道が流行する時期から定着までが、享保年間(1716-1735)以後のこととされる。そこで、享保年間以後に日本とりわけ政治の中心であった江戸において出版された中国法帖の状況から、中国のどのような書家の作品が江戸において最も人気を博していたのかを探ってみたい。

そこで本稿では、朝倉治彦と大和博幸が編集した『享保以後江戸出版書目 新訂版』<sup>5)</sup>に基づいて、享保年間以降において江戸で出版された中国集帖を整理し、中国各時代の書家の作品が江戸時代の江戸で出版された状況を明らかにしたい。

## 二 享保以後の江戸で出版された中国法帖

「唐様」の法帖が、日本ではじめて出版された実例は、正保二年(1645)に中国宋代の黄庭経の『経伏波神祠詩』一冊が刊行されたことが知られる<sup>6)</sup>。それ以後も、「唐様」書道の繁栄とともに、「唐様」法帖も大量に翻刻し刊行された。このことは江戸時代の各時期の出版書目にその趨勢が伺われる。

そこで、朝倉治彦・大和博幸編『享保以後江戸出版書目 新訂版』に基づいて、享保年間に出版された中国法帖を整理し、表1に示した。

2) 中田勇次郎著『中田勇次郎著作集』、第六巻、「心花室集」、二玄社、1985年10月、130頁。

3) 西川寧編『日本書論集成』汲古書院、1978年1月、165頁。

4) 中田勇次郎編『書道藝術』、別巻四〈日本書道史〉、昭和52年3月、118頁。

5) 朝倉治彦・大和博幸編『享保以後江戸出版書目 新訂版』臨川書店、2000年。

6) 中田勇次郎著『中田勇次郎著作集』、第六巻、「心花室集」、二玄社、1985年10月、329頁。

享保年間以降における江戸で出版された中国法帖（馬）

表1 享保以後の江戸の出版書目に見られる中国法帖

出版年・和暦	出版年・西暦	帖名	作者	冊数	出版者	売り出し
享保十二年	1727	醉翁亭記	文徵明	一卷	山口屋権兵衛	山口屋権兵衛
享保十六年	1731	阿房宮賦	文徵明	一帖	戸藏屋喜兵衛	戸藏屋喜兵衛
享保十六年	1731	洛神賦	趙子昂	一帖	小川多左衛門	小河彦九郎
享保十七年	1732	草書千字文	蔣明鳳	一冊	戸藏屋喜兵衛	
享保十七年	1732	祝枝山赤壁賦	祝枝山	一冊	戸倉屋喜兵衛	
享保十八年	1733	董其昌蓬萊帖	董其昌	一冊	利倉や喜兵衛	
享保十八年	1733	楷書千字文	文徵明	一冊	戸藏屋喜兵衛	戸藏屋喜兵衛
享保十八年	1733	顔真卿墨妙	顔真卿	一冊	柳枝軒松葉軒	萬屋清兵衛
享保十八年	1733	祝枝山素係帖	祝枝山	一冊	利倉や喜兵衛	
享保十九年	1734	文衡山法帖	文衡山	折本一冊	中村進七	
享保十九年	1734	蓮社伝	文徵明	一冊	富士屋彌惣右衛門	
享保十九年	1734	碧相法狀	文徵明	一冊	川内屋宇兵衛	中村進七
享保十九年	1734	文徵明蘭亭記	文徵明	一帖	戸倉屋喜兵衛	
享保二十年	1735	醉翁亭記	文徵明	一冊	戸藏屋喜兵衛	
享保二十年	1735	西苑詩	文徵明	一冊	戸藏屋喜兵衛	
享保二十年	1735	古詩十九首	文徵明	一冊	戸藏屋喜兵衛	
享保二十年	1735	言懷帖	文徵明	一帖	戸藏屋喜兵衛	
享保二十年	1735	梅花帖	趙子昂	一冊	戸藏屋喜兵衛	
元文二年	1737	春曉帖	文徵明	一冊	戸倉屋喜兵衛	
元文三年	1738	董其昌法帖	董其昌	全一冊	関本屋萬次郎	小川彦九郎
元文三年	1738	文徵明憶昔帖	文徵明	全一冊	関本屋萬次郎	小川彦九郎
寛延元年	1748	鶯群帖	王獻之	一冊	柳屋莊兵衛	柳屋莊兵衛
寛延二年	1749	婦去來辭	董其昌	一冊	竹川藤兵衛	竹川藤兵衛
寛延二年	1749	陳氏古印行引	董其昌	一冊	竹川藤兵衛	竹川藤兵衛
寛延二年	1749	睡起帖	文徵明	一冊	須原屋安兵衛	須原屋安兵衛 平左衛門
寛延二年	1749	明妃曲	文徵明	一冊	前川権兵衛	前川権兵衛
寛延二年	1749	兔園帖	文徵明	一冊	竹川藤兵衛	竹川藤兵衛
寛延二年	1749	舒筈帖	文徵明	一冊	須屋茂兵衛	須屋茂兵衛
寛延二年	1749	後赤壁賦	文徵明	一冊	竹川藤兵衛	竹川藤兵衛
寛延二年	1749	唐賢詩帖	趙子昂	一冊	伏見屋藤右衛門	伏見屋藤右衛門、藤三郎
寛延二年	1749	天馬賦	趙子昂	一冊	小川源兵衛	萬屋清兵衛
寛延三年	1750	墨妙	文徵明	一冊	山城屋茂左衛門	
寛延三年	1750	新選朗詠詩歌	文徵明	全一文	植村藤右衛門	植村藤二郎
寶曆元年	1751	承光殿	文徵明	一冊	奥村喜兵衛	奥村喜兵衛
寛延四年	1751	青山帖	文徵明	一冊	萬屋清兵衛	萬屋清兵衛
寛延四年	1751	洛神賦	文徵明	七折	吉文字や治郎兵衛	
寛延四年	1751	碧樹帖	文徵明	一冊	和泉屋吉兵衛	和泉屋吉兵衛
寛延四年	1751	後赤壁賦	文徵明	一冊	山城屋茂左衛門	山城屋茂左衛門
寛延四年	1751	宮怨詩	文徵明	一冊	野沢屋九左衛門	野沢屋九左衛門
寛延四年	1751	文徵明千字文	文徵明	一冊	塩屋利助	西村源六
寶曆三年	1753	離騷	歐陽率更	一冊	田中莊兵衛	須原や茂兵衛
寶曆三年	1753	小苑詩	文徵明	一冊	奥村喜兵衛	奥村喜兵衛
寶曆三年	1753	漢番君碑	趙子昂	一冊	田中莊兵衛	須原や茂兵衛
寶曆四年	1754	赤壁賦	文徵明	一冊	永田調兵衛	梅村宗五郎

寶曆四年	1754	學史百歌	祝枝山	一冊	吉文字や次郎兵衛	吉文字や次郎兵衛
寶曆五年	1755	天馬賦	米元章	一冊	須原や太兵衛	須原や太兵衛
寶曆五年	1755	虎山帖	文徵明	一冊	須原屋茂兵衛	須原屋茂兵衛
寶曆六年	1756	銀橋帖	文徵明	一冊	戸倉屋喜兵衛	鶴本平藏
寶曆七年	1757	草書千字文	文徵明	一冊	柏屋喜兵衛	須原や太兵衛
寶曆九年	1759	婦去來帖	董其昌	一冊	林権兵衛	丹波屋甚四郎
寶曆九年	1759	米元章帳殿帖	米芾	全一帖	和泉屋新八	和泉屋新八
寶曆九年	1759	雪賦	趙子昂	一冊	林権兵衛	前川権兵衛
寶曆九年	1759	智永楷書千字文	智永	一冊	植村藤右衛門	植村藤三郎
寶曆十年	1760	大書蘭亭帖	王羲之	一冊	河南四郎右衛門	須屋茂兵衛
寶曆十四年	1764	歐陽公文集	歐陽修	全十冊	吉田屋四郎右衛門	須原屋平助
明和元年	1764	歐陽詢千字文	歐陽詢	全一冊	山崎金兵衛	山崎金兵衛
明和元年	1764	趙之昂楚水帖	趙子昂	一冊	菊屋喜兵衛	須原屋茂兵衛
明和元年	1764	蓮昌宮詞	祝枝山	一冊	松本善兵衛	松本善兵衛
明和二年	1765	樂毅論	王羲之	一冊	山崎金兵衛	山崎金兵衛
明和四年	1767	尺牘帖	趙子昂	一冊	植村藤右衛門	植村藤三郎
明和六年	1769	王羲之丙舍帖	王羲之	全一冊	山崎屋金兵衛	山崎屋金兵衛
明和七年	1770	瘞鶴銘	王羲之	一冊	小川彦九郎	小川彦九郎
明和九年	1772	蘭亭記	王羲之	一帖	小川彦九郎	小川彦九郎
安永五年	1776	九成宮	歐陽詢	一冊	前川六左衛門	前川六左衛門
安永五年	1776	歐陽詢千字文	歐陽詢	一冊	須原屋市兵衛	須原屋市兵衛
安永五年	1776	軫書蘭亭	王羲之	一冊	土屋伊右衛門	土屋伊右衛門
安永五年	1776	山光帖	文徵明	一冊	山雲寺和泉	山雲寺和泉
安永八年	1779	知東帖	王羲之	一冊	吉文字屋治郎兵衛	吉文字屋治郎兵衛
安永八年	1780	子昂普門品	趙子昂	全一冊	増田屋源兵衛	西林源六
天明五年	1785	素糸帖	祝枝山	一冊	野田七兵衛	野田七兵衛
寛政三年	1791	天朗法帖	王羲之	全一冊	山崎屋金兵衛	山崎屋金兵衛
寛政五年	1793	婦盤穀序	趙子昂	一帖	山口屋又市	須原屋茂兵衛
寛政八年	1796	蘭亭帖	王羲之	十八折	若林清兵衛	
寛政十年	1798	郭有道碑	蔡邕	全一帖	須原屋伊八	須原屋伊八
寛政十年	1798	繹山碑	蔡邕	全一帖	須原屋伊八	須原屋伊八
寛政十年	1798	西峰帖	董其昌	九折	山田佐助	
寛政十年	1798	百艸帖	董其昌	九折	山田佐助	
寛政十年	1798	壽詩帖	董其昌	七折	山田佐助	
寛政十年	1798	青青帖	董其昌	六折	山田佐助	
寛政十年	1798	畫錦堂	董其昌	十折	山田佐助	
寛政十年	1798	池上篇	董其昌	九折	山田佐助	
寛政十年	1798	雨語帖	董其昌	八折	山田佐助	
寛政十年	1798	米元章湘西帖	米元章	全一帖	須原屋伊八	須原屋伊八
寛政十年	1798	問訊帖	米元章	全一帖	出雲寺和泉	出雲寺和泉
寛政十年	1798	宮詞帖	蘇東坡	十二折	山田佐助	
寛政十年	1798	東坡荔枝帖	蘇東坡	全一帖	須原屋伊八	須原屋伊八
寛政十一年	1799	百家姓	董其昌	一帖	山田佐助	
寛政十一年	1799	千文敬午	董其昌		山田佐助	
寛政十一年	1799	蓮池堂法帖	董其昌	折本一帖	長穀川新兵衛	
寛政十年	1799	繼錦堂藏帖	米芾	全一帖	須原屋善五郎	須原屋善五郎

享保年間以降における江戸で出版された中国法帖（馬）

寛政十一年	1799	徵明赤壁賦	文徵明	全一帖	山田佐助	山田佐助
寛政十一年	1799	百家姓	文徵明	全一帖	須原屋市兵衛	須原屋市兵衛
寛政十二年	1800	秣陵帖	董其昌	折本一帖	須原屋市兵衛	
寛政十二年	1800	葉韻千字文	董其昌	全一冊	柏屋喜兵衛	須原屋茂兵衛
寛政十二年	1800	天冠山帖	趙子昂	全一冊	葛西市郎兵衛	須原屋平助
享和元年	1801	褚遂良千字文	褚遂良	全一帖	須原屋伊八	須原屋伊八
享和元年	1801	董其昌大寶帖	董其昌	全一帖	須原屋伊八	須原屋伊八
享和元年	1801	董其昌樂志論	董其昌	全一帖	須原屋伊八	須原屋伊八
享和元年	1801	孫過庭獅子賦	孫過庭	全一帖	須原屋伊八	須原屋伊八
享和元年	1801	羲之聖教序	王羲之	全一帖	須原屋伊八	須原屋伊八
享和元年	1801	趙子昂文賦	趙子昂	全一帖	須原屋伊八	須原屋伊八
享和元年	1801	子昂風煙帖	趙子昂		須原屋伊八	須原屋伊八
享和元年	1801	子昂秋菊帖	趙子昂		須原屋伊八	須原屋伊八
享和元年	1801	子昂歸田帖	趙子昂		須原屋伊八	須原屋伊八
享和元年	1801	子昂蘭亭記	趙子昂	一帖	須原屋伊八	須原屋伊八
享和元年	1801	子昂雪賦	趙子昂	全一帖	須原屋伊八	須原屋伊八
享和元年	1801	趙子昂蜀道難	趙子昂	全一帖	須原屋伊八	須原屋伊八
享和元年	1801	真艸千字文	智永	全一冊	植村藤右衛門	長穀川新兵衛
享和二年	1802	蔡襄作字帖	蔡襄	全一帖	近江屋與兵衛	近江屋與兵衛
享和二年	1802	董其昌雲月帖	董其昌	全一帖	近江屋與兵衛	近江屋與兵衛
享和二年	1802	米元章天馬賦	米元章	全一帖	近江屋與兵衛	近江屋與兵衛
享和二年	1802	菊亭帖	王羲之	全一帖	須原屋伊八	須原屋伊八
享和三年	1803	花品帖	董其昌	全一帖	近江屋與兵衛	近江屋與兵衛
享和三年	1803	江南帖	董其昌	全一帖	近江屋與兵衛	近江屋與兵衛
享和三年	1803	含翠亭帖	米芾	全一帖	近江屋與兵衛	近江屋與兵衛
文化四年	1807	多寶塔碑	顏真卿	全一帖	鴨伊兵衛	鴨伊兵衛
文化六年	1809	米元章繼錦堂帖	米芾	全一冊	西村清藏	西村清藏
文化六年	1809	少來帖	米芾	全一冊	和泉屋新八	和泉屋新八
文化六年	1809	千字文	趙文敏	全一冊	和泉屋吉兵衛	和泉屋吉兵衛
文化七年	1810	擬古帖	米元章	全一冊	須原屋文五郎	須原屋文五郎
文化八年	1811	清蹕帖	米元章	全一冊	和泉屋莊次郎	和泉屋莊次郎
文化八年	1811	米元章天馬賦	米元章	全一冊	須原屋善五郎	須原屋善五郎
文化八年	1811	東坡畝丘帖	蘇東坡	全一冊	須原屋茂兵衛	須原屋茂兵衛
文化八年	1811	西園詩	文徵明	全一冊	和泉屋莊次郎	和泉屋莊次郎
文化九年	1812	研廬帖	董其昌	全一冊	須原屋茂兵衛	須原屋茂兵衛
文化九年	1812	秣陵帖	董其昌	全一冊	須原屋伊八	須原屋伊八
文化九年	1812	笙臺賦	米元章	全一冊	須原屋茂兵衛	須原屋茂兵衛
文化九年	1812	米元章大字法帖	米元章	全一冊	前川六左衛門	前川六左衛門
文化九年	1812	玉照堂法帖	米元章	全一冊	堀野展儀助	堀野展儀助
文化九年	1812	蘇文忠公山房帖	蘇東坡	全一冊	山田佐助	山田佐助
文化十年	1813	蓬萊帖	米元章	全一冊	須原屋善五郎	須原屋善五郎
文化十年	1813	經訓堂法書	趙子昂	全一帖	鴨伊兵衛	鴨伊兵衛
文化十年	1813	中峰帖	趙子昂	全一帖	鴨伊兵衛	鴨伊兵衛

表1に示したように、朝倉治彦・大和博幸編『享保以後江戸出版書目 新訂版』に見られる中国法帖の出版された最も早い例は享保十二年（1727）であり、遅いのは文化十年（1813）である。この87年間にわたって中国書家の作品のべ133種類の法帖が出版された。

中国の時代ごとに各書家により分けてみれば、晋代の王羲之、王献之父子が17種、唐代の欧陽詢、欧陽修、顔真卿、蘇東坡、孫過庭、褚遂良といった有名な書家で17種、北宋の米元章（芾）が15種、元代の趙孟頫（子昂）が21種、明代の文徵明が36種、董其昌が24種、祝允明（枝山）が5種で、全てで65種類に達している。すなわち元、明両代の書家の法帖の出版総数の半分以上を占めていることがわかる。

これらから江戸時代の日本人から注目された元明両代の書家の人気さが伺われる。注目された作家の法帖の出版量を示すために図1を作成した。元明両代の書家の法帖の出版された具体的な状況については次節において述べたい。

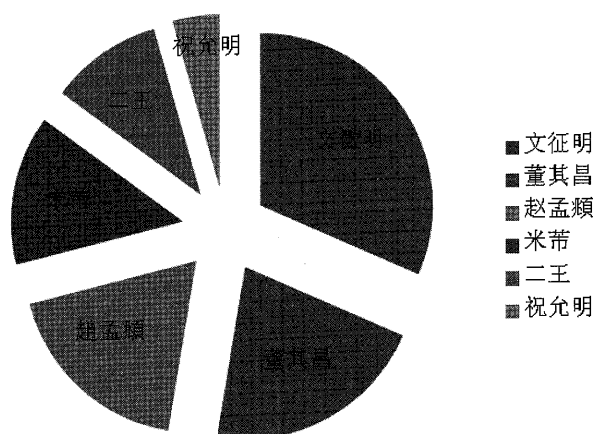


図1 江戸で出版された中国の書家法帖比較図

### 三 趙孟頫、文徵明及び董其昌等の江戸における法帖出版の状況

表1に示した朝倉治彦・大和博幸編『享保以後江戸出版書目 新訂版』に見られるように、江戸時代の日本で出版された中国書家の法帖では、元明両代の書家の作品が半数以上を占めていた。とりわけこれらの法帖は、各書家自身の作品のみで構成された単帖が大部分を占め、集帖の数は意外と少ない。その理由は多くの書家の書作を集めた集帖より、一人の書家の作品のみの単帖がかえって人気があったことがわかる。

そこで以下に出版数の割合の高い趙孟頫及び文徵明、董其昌を中心として、その出版の具体的な状況を明らかにしたい。詳しくは表2に示した。

表2 趙孟頫・文徵明及び董其昌の法帖の江戸出版の状況

作者名	出版年・日本暦	出版年・西暦	法帖名	出版者	売り出し
趙孟頫に関する法帖					
趙孟頫	文化六年	1809	千字文	和泉屋吉兵衛	和泉屋吉兵衛
	享保十六年	1731	洛神賦	小川多左衛門	小河彦九郎
	享保二十年	1735	梅花帖	戸藏屋喜兵衛	
	寛延二年	1749	唐賢詩帖	伏見屋藤右衛門	伏見屋藤右衛門、藤三郎
	寛延二年	1749	天馬賦	小川源兵衛	萬屋清兵衛
	寶暦三年	1753	漢番君碑	田中莊兵衛	須原や茂兵衛
	寶暦九年	1759	雪賦	林権兵衛	前川権兵衛
	明和元年	1764	趙之昂楚水帖	菊屋喜兵衛	須原屋茂兵衛
	明和四年	1767	尺牘帖	植村藤右衛門	植村藤三郎
	安永八年	1780	子昂普門品	増田屋源兵衛	西林源六
	寛政五年	1793	帰盤穀序	山口屋又市	須原屋茂兵衛
	寛政十二年	1800	天冠山帖	葛西市郎兵衛	須原屋平助
	享和元年	1801	趙子昂文賦	須原屋伊八	須原屋伊八
	享和元年	1801	子昂風煙帖	須原屋伊八	須原屋伊八
	享和元年	1801	子昂秋菊帖	須原屋伊八	須原屋伊八
	享和元年	1801	子昂歸田帖	須原屋伊八	須原屋伊八
	享和元年	1801	子昂蘭亭記	須原屋伊八	須原屋伊八
	享和元年	1801	子昂雪賦	須原屋伊八	須原屋伊八
	享和元年	1801	趙子昂蜀道難	須原屋伊八	須原屋伊八
	文化十年	1813	経訓堂法書	鴨伊兵衛	鴨伊兵衛
文化十年	1813	中峰帖	鴨伊兵衛	鴨伊兵衛	
文徵明に関する法帖					
文徵明	享保十二年	1727	醉翁亭記	山口屋権兵衛	山口屋権兵衛
	享保十六年	1731	阿房宮賦	戸藏屋喜兵衛	戸藏屋喜兵衛
	享保十八年	1733	楷書千字文	戸藏屋喜兵衛	戸藏屋喜兵衛
	享保十九年	1734	文衡山法帖	中村進七	
	享保十九年	1734	蓮社伝	富士屋彌惣右衛門	
	享保十九年	1734	碧相法状	川内屋宇兵衛	中村進七
	享保十九年	1734	文徵明蘭亭記	戸倉屋喜兵衛	
	享保二十年	1735	醉翁亭記	戸藏屋喜兵衛	
	享保二十年	1735	西苑詩	戸藏屋喜兵衛	
	享保二十年	1735	古詩十九首	戸藏屋喜兵衛	
	享保二十年	1735	言懷帖	戸藏屋喜兵衛	
	元文二年	1737	春曉帖	戸倉屋喜兵衛	
	元文三年	1738	文徵明憶昔帖	関本屋萬次郎	小河彦九郎
	寛延二年	1749	睡起帖	須原屋安兵衛	須原屋安兵衛 平左衛門
	寛延二年	1749	明妃曲	前川権兵衛	前川権兵衛
	寛延二年	1749	兔園帖	竹川藤兵衛	竹川藤兵衛
	寛延二年	1749	舒窈帖	須屋茂兵衛	須屋茂兵衛
	寛延二年	1749	後赤壁賦	竹川藤兵衛	竹川藤兵衛
	寛延三年	1750	墨妙	山城屋茂左衛門	
	寛延三年	1750	新選朗詠詩歌	植村藤右衛門	植村藤二郎
寛延四年	1751	青山帖	萬屋清兵衛	萬屋清兵衛	

	寛延四年	1751	洛神賦	吉文字や治郎兵衛	
	寛延四年	1751	碧樹帖	和泉屋吉兵衛	和泉屋吉兵衛
	寛延四年	1751	後赤壁賦	山城屋茂左衛門	山城屋茂左衛門
	寛延四年	1751	宮怨詩	野沢屋九左衛門	野沢屋九左衛門
	寛延四年	1751	文徵明千字文	塩屋利助	西村源六
	寶暦元年	1751	承光殿	奥村喜兵衛	奥村喜兵衛
	寶暦三年	1753	小苑詩	奥村喜兵衛	奥村喜兵衛
	寶暦四年	1754	赤壁賦	永田調兵衛	梅村宗五郎
	寶暦五年	1755	虎山帖	須原屋茂兵衛	須原屋茂兵衛
	寶暦六年	1756	銀橋帖	戸倉屋喜兵衛	鶴本平藏
	寶暦七年	1757	草書千字文	柏屋喜兵衛	須原や太兵衛
	安永五年	1776	山光帖	山雲寺和泉	山雲寺和泉
	寛政十一年	1799	徵明赤壁賦	山田佐助	山田佐助
	寛政十一年	1799	百家姓	須原屋市兵衛	須原屋市兵衛
	文化八年	1811	西園詩	和泉屋莊次郎	和泉屋莊次郎
<b>董其昌に関する法帖</b>					
<b>董其昌</b>	享保十八年	1733	董其昌蓬萊帖	利倉や喜兵衛	
	元文三年	1738	董其昌法帖	関本屋萬次郎	小川彦九郎
	寛延二年	1749	婦去來辭	竹川藤兵衛	竹川藤兵衛
	寛延二年	1749	陳氏古印行引	竹川藤兵衛	竹川藤兵衛
	寶暦九年	1759	婦去來帖	林権兵衛	丹波屋甚四郎
	寛政十年	1798	西峰帖	山田佐助	
	寛政十年	1798	百艸帖	山田佐助	
	寛政十年	1798	壽詩帖	山田佐助	
	寛政十年	1798	青青帖	山田佐助	
	寛政十年	1798	畫錦堂	山田佐助	
	寛政十年	1798	池上篇	山田佐助	
	寛政十年	1798	雨語帖	山田佐助	
	寛政十一年	1799	百家姓	山田佐助	
	寛政十一年	1799	千丈敬午	山田佐助	
	寛政十一年	1799	蓮池堂法帖	長穀川新兵衛	
	寛政十二年	1800	秣陵帖	須原屋市兵衛	
	寛政十二年	1800	葉韻千字文	柏屋喜兵衛	須原屋茂兵衛
	享和元年	1801	董其昌大寶帖	須原屋伊八	須原屋伊八
	享和元年	1801	董其昌樂志論	須原屋伊八	須原屋伊八
	享和二年	1802	董其昌雲月帖	近江屋與兵衛	近江屋與兵衛
	享和三年	1803	花品帖	近江屋與兵衛	近江屋與兵衛
	享和三年	1803	江南帖	近江屋與兵衛	近江屋與兵衛
	文化九年	1812	研廬帖	須原屋茂兵衛	須原屋茂兵衛
文化九年	1812	秣陵帖	須原屋伊八	須原屋伊八	



### （一）趙孟頫

趙孟頫（1254-1322）は、字が子昂、号が松雪道人で、中国元代初期の著名な書家、画家及び詩人である。江戸時代における長崎貿易を通じて日本に輸入された彼の集帖には、『経訓堂法書』、『快雪堂法書』及び『墨池堂帖』が知られる<sup>7)</sup>。

趙孟頫の21種類の法帖が江戸で出版されたことは表2に示した。その中で、文化十年（1813）に出版された『経訓堂法書』だけが集帖であり、残りの20種類が全部単帖である。さらに特徴的なことは享和元年（1801）の一年間のみで『趙子昂文賦』、『子昂風煙帖』、『子昂秋菊帖』、『子昂歸田帖』、『子昂蘭亭記』、『子昂雪賦』、『趙子昂蜀道難』と7種類の単帖が出版されたことである。その全てが須原屋伊八という版元によって出版された。

須原屋伊八は、文化元年（1804）四月当時、幕府から公許された書物仲間三組すなわち通町組、中通組そして南組のうちの南組に「下谷池之端仲町 青黎閣 須原屋伊八」<sup>8)</sup>とその名を見出すことから、趙孟頫の法帖を出版したのはこの南組の須原屋伊八が出版したことは確かであろう。

さらに嘉永六年（1853）年度の書物問屋の「書物問屋年行司」として、須原屋茂兵衛、須原屋新兵衛、須原屋嘉七、須原屋伊八、英屋大助、山城屋佐兵衛、和泉屋金右衛門、須原屋佐助の八名に並んで、須原屋伊八が第四位に位置していた<sup>9)</sup>。須原屋伊八は書籍商としては老舗であった。また須原屋伊八は、趙孟頫の法帖7種を出版した享和元年（1801）の三年前の寛政十年（1798）当時「青黎閣蔵板書目録」として、『四書集註』、『周易古註』、『物理小識』、『七經孟子考文補遺』、『鑒鐵論』などを初めとする中国古典籍に関するさまざまな書籍を出版していた書籍商<sup>10)</sup>であり、この意味でも趙孟頫の書風の流行を鑑みてさまざまな趙孟頫の書風に関する法帖を刊行したものと思われ、またその刊行の頻度の多さが趙孟頫の書風の流行に拍車をかけたとも言えるであろう。

趙孟頫の書風がいかに流行していたかについて、春名好重は『日本書道史』に、

唐様は中国風の書風である。日本風の書風を和様というのに対して、中国風の書風を唐様という。

しかし、普通唐様というのは江戸時代に流行した明の文徵明、元の趙子昂の書風である。江戸時代には中国風の書のうち文徵明・趙子昂の書風が最も尊重され、広く流行していたので、唐様というと文徵明・趙子昂の書風をさす。<sup>11)</sup>

と指摘するように、江戸時代における唐様の流行とは、文徵明と趙孟頫の書風が最も影響力を持っていたといえよう。

7) 馬成芬「江戸時代における董其昌法帖の受容について」、『文化交渉』第3号（関西大学大学院東アジア文化研究科院生論集）2014.9.201-216頁。

8) 上里春生『江戸書籍商史』名著刊行会、1976年4月、115頁。

9) 上里春生『江戸書籍商史』132頁。

10) 松浦章『近世東アジア海域の帆船と文化交渉』関西大学出版部、2013年10月、195-197頁。

11) 春名好重著『日本書道史』、淡交社、昭和49年4月、238頁。

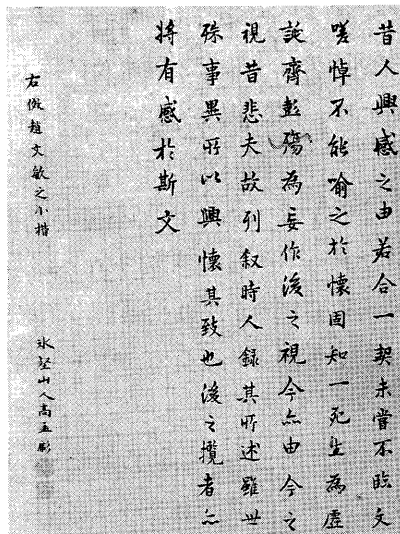


図1 高芙蓉臨趙孟頫小楷



図2 趙孟頫小楷

## (二) 文徵明

文徵明(1470-1559)は、中国の明代の有名な書家で、蘇州の出身で、幼名を璧、字を徵明とし、後に徵仲と改めた。衡山、衡山居士、停雲生と号し、文衡山と呼ばれることも多く、また官名から文待詔とも称された<sup>12)</sup>。文徵明と彼の二人の子とともに編集した『停雲館法帖』が模者・刻者両面から精良なため明代の代表的な法帖と称された<sup>13)</sup>。

表2に示したように、享保十二年-文化八年(1727-1811)の74年間にわたって文徵明に関する36種の法帖が出版されたことが知られる。さらに、この36種類の法帖は全て単帖で、彼の代表的で有名な『停雲館法帖』と言う集帖は一つも見られない。

出版の年代から見れば、享保年間(1727-1735)と寛延年間(1749-1751)の両年間に集中している。享保年間は11種類、寛延年間には14種類の法帖が出版された。この36種類の法帖には、『千字文』と『赤壁賦』とが各々3種類が見られる。これらの出版は享保年間において主に戸倉屋喜兵衛という版元によって行われた。『日本書論集成』に、戸倉屋喜兵衛について触れているので参考に掲げたい。

書法群碎 松下辰(鳥石)元文四年(1739)序江戸戸倉屋喜兵衛刊本 大一冊(中略)刊行書肆戸倉屋喜兵衛は、江戸日本橋通南三丁目にあった生白堂のことで、他にも墨帖や書法関係の出版物が多い<sup>14)</sup>。

とあるように、戸倉屋喜兵衛は、主に書法関係の出版物を出版していた版元であった。

文徵明の書風の影響を受けた日本書家では、江戸前期の有名な書家であり陽明学者であった北島雪山及び細井広沢を代表としてあげたい。<sup>15)</sup> 北島雪山は文徵明の書法を学ぶために、明人の愈立德から文徵明

12) 清・萬斯同『明史』卷三百八十七文苑傳 清鈔本。

13) 清・倪濤『六藝之一録』卷一百四十六清文淵閣四庫全書本。

14) 西川寧編、北川博邦解題『日本書論集成』第一卷、昭和53年1月。

15) 中田勇次郎編集、『日本書道史』、別巻4、書道芸術、中央公論社、昭和52年3月、129頁。

の筆法を教授された。それゆえに、彼の技法と筆勢も唐様書道の上品と見られ、「江戸唐様第一人」と称されている<sup>16)</sup>。

さらに、春名好重の『日本書道史』には文徵明書風の伝承について触れている。

北島雪山が長崎で文徵明の書法を伝えられ、それを江戸で細井広沢に伝え、広沢が唐様を流行させた。二老略伝の明衡山文先生正伝筆法統脈によれば、文徵明の書法は、文徵明－文彭－文嘉－文啓美－全梁－任徳元－愈立德－北島雪山－細井広沢と続いた。<sup>17)</sup>

と記したように、文徵明の書風は中国では、彼の二人の子、日本では、愈立德、北島雪山及び細井広沢によって広く伝えられた。

そこで、参考に文徵明と北島雪山と細井広沢の三者の行書を図2-4に掲げ比較してみた。

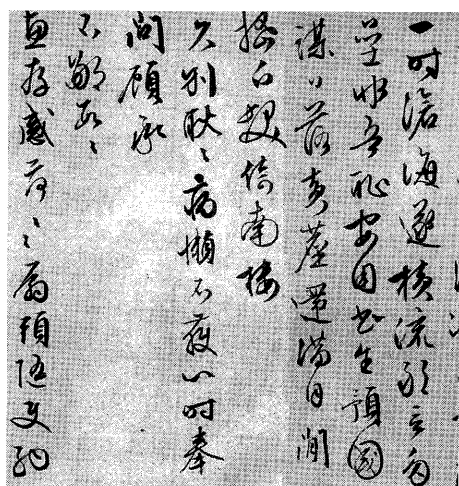


図3 文徵明 行書

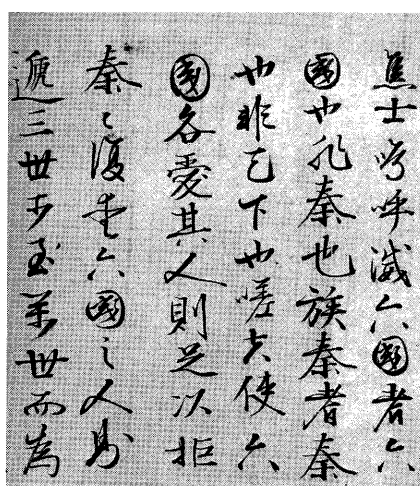


図4 北島雪山 行書 阿房宮賦

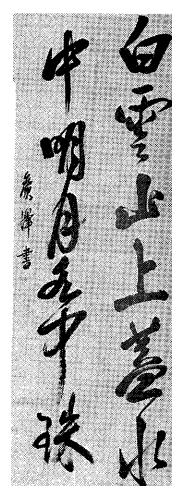


図5 細井広沢 二行軸

文徵明の書風は儒雅かつ温純的である。この点から見れば、北島雪山は文徵明の書風により近づいている。細井広沢は文徵明の書法を北島雪山より間接的に習得したためか、その書風には自分なりの風格を混じえるように見られる。しかし、彼の字の書体から見れば、文徵明のといささか似ていることが伺われる。

### (三) 董其昌

董其昌（1555-1636）は明末の有名な書家で、字が玄宰、号が思白、思翁、香光とされ、上海華亭（現在上海松江区）の出身であった<sup>18)</sup>。

表2から董其昌に関するものとして24種類の法帖が見られる。これら24種の法帖の中で『研廬帖』だけが董其昌の「専帖」<sup>19)</sup>ではなく、それ以外は全て董其昌の単帖である。

16) 中田勇次郎編集『日本書道史』、別巻4、〈書道藝術〉、中央公論社、昭和52年3月、128頁。

17) 春名好重著『日本書道史』、淡交社、昭和49年4月、239頁。

18) 清・萬斯同『明史』卷三百八十八文苑傳。

19) 馬成芬「江戸時代における董其昌法帖の受容について」、『文化交渉』第3号（関西大学大学院東アジア文化研究科院生論集）2014.9.201-216頁。

清代容庚の『叢帖目』に『研廬帖』について次のように述べられている。

『研廬帖六卷』明董其昌書、崇禎四年、吳泰摹勒、帖名篆書<sup>20)</sup>。

とあるように、この『研廬帖』は董其昌の書跡を専ら集めたものであることがわかる。

江戸時代の出版時期から見れば、董其昌の法帖の出版は主に寛政年間（1798-1800）に集中し、延べ12種類すなわちその半分がこの時期に出版されている。それに寛政年間に日本で出版された法帖はほとんどが山田佐助という版元から刊行されている。

江戸時代における董其昌の書風を受けた日本書家では、市河蘭台及びその子寛斎を挙げることが出来る<sup>21)</sup>。市河寛斎すなわち「幕末三筆」の一人である市河米庵の父で、祖父である蘭台ともに江戸中期の有名な書家で、董其昌の書風を深く受け、一家の書風をなした。

もう一人は中井董堂である。中井董堂は、名は敬義、号は董堂であり、江戸の人で、折衷学の山本北山（1752-1812）に学び、詩作を得意とし、書にたくみであったとされる<sup>22)</sup>。

中井董堂（1758-1821）は、董其昌に心酔してみずから董堂と名乗ったほどの人で、その書風は、董よりでてさらに洒脱をきわめ、また一風を成している<sup>23)</sup>。

とされるように、董其昌をもっぱら尊び、そして自分の号にさえにも董を加えた。董其昌の書風を単に模倣するのではなく、その基礎の上に、自分なりの書風をなしたのであった。

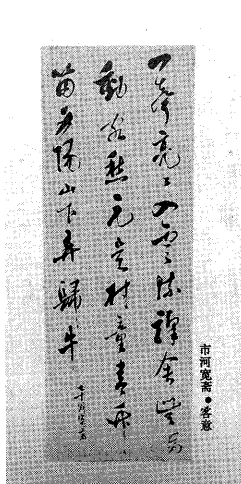


図6 市河寛斎・客意

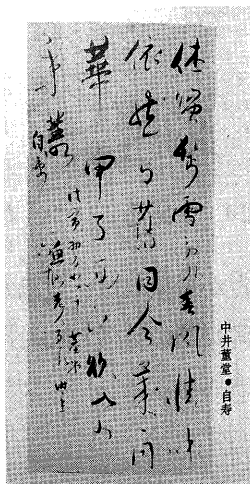


図7 中井董堂・自寿

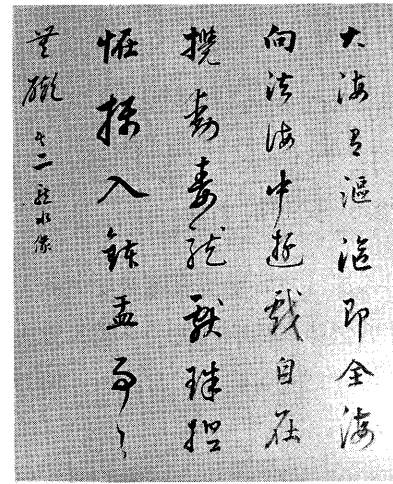


図8 董其昌行草書

董其昌の書風は飄逸のもので市河米庵と中井董堂の書風が董其昌の書風を継承したとは言いがたいのであるが、字体や字形を書風より習得したわけである。それは何回目目の模写により伝存された集帖には字の構造を書風より彰顯されたためであろうかと考えられる。

20) 容庚、『叢帖目』、中華書局、1980年、1253頁。

21) 中田勇次郎編集『書道芸術』、別巻第四、「日本書道史」、中央公論社、昭和52年、131頁。

22) 關儀一郎・關義直編『近世漢學者傳記著述大事典 附系譜・年表』357頁。

23) 中田勇次郎編集『書道芸術』、別巻第四、「日本書道史」、中央公論社、昭和52年、131頁。

#### 四 おわりに

江戸時代における享保年間以降の江戸で出版された中国法帖を整理した結果、中国の元明兩代の書家の法帖が、極めて多くのものが出版されていたことが知られる。江戸時代における法帖の出版状況に関して、すでに中田勇次郎は宝暦、明和の両年間における出版書目を蒐集し、元代の趙孟頫、明代の祝允明、文徵明、董其昌に関する法帖の出版が圧倒的に量を占めていたことを指摘していた<sup>24)</sup>。しかし宝暦、明和年間以降については詳らかでなかったが、本稿でさらに享保から文化に及ぶ時期を中心に数量的に明らかにした法帖の中国からの輸入と同時に日本で刊行された法帖数から見て、中田勇次郎の指摘した傾向とも一致していると言える。

それに、元代の趙孟頫と明代の文徵明は江戸時代に書風がこれほど尊重される原因については春名好重が指摘した。

江戸時代にも王羲之が最も優れた能書といわれていた。それにも拘らず、趙子昂、文徵明が特別に尊重されたのはこの二人の書跡が残っていて、それによって羲之の筆意を悟ることができるからである。窮極においては之に到達することを望んでいたが、羲子の真蹟は残っていないので、見るできないからである。羲之の筆意を直接学ぶことができないから、徵明、子昂を通じて間接に羲之の筆意を学び、羲之に到達したいと考えたのである。<sup>25)</sup>

と記したように、日本でも中国でも王羲之を能書の第一人と認めることは一致する。それに、王羲之を学ぶために、王羲之の筆意を最も習得できた文徵明、趙子昂を通じて学ぶことになった。これは二人の書風が江戸時代の書道分野において最も尊重される一因と見られる。

とりわけ本稿で述べたように、宝暦、明和年間（1751-1771）のみならず、享保十二（1727-1797）の70余年にわたり江戸で出版された中国法帖と言う視点から考えれば、集帖より単帖の量をはるかに多いことが明らかになったと言える。しかもこれらの元明時代の著名な作家の法帖は、特定の版元から、享和元年（1801）に須原屋伊八が趙孟頫の法帖7種を出版したように、幾度も出版された傾向が如実に見られることから、販売部数の量の多さを類推することはさほど困難ではなく、江戸時代における「唐様」用式の書道の隆盛を容易に知ることが出来ると言えるであろう。

24) 中田勇次郎編集『書道藝術』、別巻第四「日本書道史」、中央公論社、昭和52年3月、131頁。

25) 春名好重著『日本書道史』、淡交社、昭和49年4月、241頁。